五兩、薤白廿莖、已上自寮庫行之　苦酒四升、猪膏十斤、藥篩絹四尺、大筒二合、折櫃二合、炭一石、

右起十一月下旬盡十二月下旬、依例造備、所須雜物、十月十五日申省、省申官、下符所司、十一月上旬請備、其雜物數隨時增減、○中略

東宮白散一劑、度嶂散一劑、屠蘇一劑、並盛同上　七氣丸二劑、四味理仲丸四劑、供藥漆案二脚、一脚安屠蘇、一脚安白散、白銅鋺三口、蠻繪下食盤四口、緋囊一口、長二尺　囊緒絲一兩、紙十張、木綿二分、所須人參九兩二分、甘草九兩二分、桂心三分、干薑九兩三分、白朮十兩三分、大黄五兩二分、附子二兩二分、桔梗四兩三分、蜀椒三兩一分、防風三兩、菝葜二分、烏頭四兩、細辛三兩三分、麻黄一兩一分、半夏一兩二分、吳茱萸一兩二分、昌蒲一兩二分、伏苓一兩二分、芎藭一兩二分、紫菀一兩二分、石膏一兩二分、柴胡一兩二分、桃人一兩二分、油絁七尺、折櫃二合、餘器通用御藥　右料理供進依上例、但寮頭已下醫生已上共執入進、

〔世諺問答〕正月　問て云、元三の日は屠蘇白散の酒を呑と云事ありや、○中略　答、○中略　白散とは、五色の藥をつきふるひて、二こんにこれを供す、功能は大略とそのごとし、これをば方寸のさじにてすくひて酒にいるゝ、また度瘴散といふは、九種の藥をつきふるひて、三獻にこれを供す、山嵐瘴氣をのぞく藥術也、風おこりの物をのぞく藥なり、これをば一錢の茶匙にてすくひて、酒にいれて可呑よし見えたり、

〔年中行事故實考一正月〕屠蘇酒○中略　屠蘇の方は醫家にて種々あり、古代より禁中に用られし方、

白朮、桔梗、山椒、防風、各壹匁　肉桂、五分　大黄、貳分半　右は紅の袋に入、東へ指たる桃の枝を、長さ二寸に切結び付、大晦日の夜、井の内へ下置、元朝取出し、土器に入備ふ、　白散の方、白朮、桔梗、各壹匁五分　細辛、三分半　右は土器へ入、上を白紙にてはる、　度嶂散の方　蓽撥、山椒、細辛、防風、桔梗、乾薑、白朮、肉桂、各五分　右は土器へ入、上を黄紙にて張る、　膏藥の方とうやくとこれを唱ふ、故實あり、　細辛、乾薑、山椒、肉桂、大黄、各七分　大風子の油にて煉、土器に入、上包はなし、